小・中・都立学校

平　成　17　年　度

教育研究員研究報告書

学　校　図　書　館

東京都教職員研修センター

目　　次

Ⅰ　研究主題および全体構想
1　研究主題 …… 2
2　研究主題設定の理由 …… 2
3　目指す児童・生徒像 …… 2
4　基本的な考え方 …… 2
5　研究仮説 …… 3
6　研究内容と方法 …… 3
7　研究構想図 …… 4

Ⅱ　研究内容

1　第１分科会　読書への意欲を高め、習慣化を図る指導の工夫
（1）分科会テーマ設定の理由 …… 5
（2）研究内容と方法 …… 6
（3）読書能力と読書興味の発達段階例一覧表 …… 7
（4）「振り返りカード」の記入方法と活用の視点 …… 8
（5）検証授業：本と友だちになろう
（国語科　小学校第３学年） …… 9
（6）小学校「振り返りカード」の活用例 …… １１
（7）中学校・高等学校「振り返りカード」の活用例 …… １３

2　第２分科会　「情報活用の実践力」を育てる指導の工夫
（1）分科会テーマ設定の理由 …… １４
（2）研究内容と方法 …… １４
（3）検証授業：人と「もの」との付き合い方
（国語科　小学校第５学年） …… １６
（4）検証授業の考察 …… １９
（5）検証事例 …… ２２
①中学校 ②高等学校 ③ろう学校高等部

Ⅲ　研究の成果と課題 …… ２４

Ⅰ　研究主題および全体構想

１　研究主題　「個に応じた学校図書館活動の一層の充実」

２　研究主題設定の理由

平成 16 年 2 月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」の「Ⅱ　これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策について」第 2 の１（１）「読書の重要性」の中では、読書とは、「文学作品を読むことに限らず、自然科学・社会科学関係の本や新聞･雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する本を読んだりすることなども含めたもの」と定義し、「国語力」を育てる上で「中核となるもの」「『教養・価値観・感性等』を生涯を通じて身に付けていくために極めて重要なもの」としている。しかし、それに続く第 2 の２（３）「望ましい『読書指導』の在り方」では、「読書については『本を読むこと自体が楽しい』という読み方を学校教育の中で教える必要があり、これまでの教育では、読むことの楽しさを教えることに失敗しているのではないかとも考えられる。」としている。

そうした状況から、学校図書館の活動（以下「学校図書館活動」という。）は、一層の充実が求められる。学校図書館活動とは、そこで行われる活動全般を指し、大きく分ければ「図書資料の質的･量的な充実と整備」と「読書活動（情報活用、利用指導を含む）」とに分けられると考える。前者の現状は達成率に大きな格差があり、学校図書館図書標準に基づいて資料を充実させ、活用しやすく整備していかなければならない。この点については、平成 16 年度東京都教育研究員学校図書館部会研究報告書の「児童・生徒が利用しやすい学校図書館整備」にまとめられている。また、後者の「読書活動」は、児童･生徒一人一人の読書興味や読書力には大きな格差があることから個に応じた指導の工夫が必要である。さらに、前述の答申で求められている「自ら本に手を伸ばす子供を育てる」「自ら本を手に取る気持ち」になるようにするための指導の工夫が重要だと考える。

以上のことを踏まえ、学校図書館における主体的な読書活動（情報活用を含む）について、個々の興味や能力に応じた学校図書館活動を一層充実させるために、上記の研究主題を設定した。

３　目指す児童・生徒像

- 幅広く自ら本を手にとり、読書を楽しむ児童･生徒。
- 進んで学校図書館を利用し、多種多様な情報･資料を必要に応じて活用する児童・生徒。

４　基本的な考え方

ただ「本を読みなさい」「何かわからないことについて調べなさい」と言われて本に向かっても、子どもたちの読書意欲は高まるものではない。平成１６年度東京都教育研究員学校図書館部会の研究成果にある通り、個々の発達段階に応じた指導を行うことは、選書の幅を広げ、読書意欲を高める上で効果的である。そして、その意欲を維持させ、読書習慣を身に付けさ

せることが大切である。そのためには、個々の発達段階に適したより多くの本と出会わせ、読書の楽しみや読書から何かを得る喜びを体験させる指導の工夫が必要だと考える。下図の通り、「読書」の「楽しみ」と、調べ学習の際の「情報活用」による「何かを得る喜び」とに共通することは、「得たものを他の人へ発信し、交流（共有）する」ことである。それを体験させることによって個々の読書体験が質的に一層深まり、「自ら本を手にとる」ようになると考える。

5　研究仮説

児童・生徒自らの読書活動や授業などで活用できるように整備された学校図書館を基盤として、個々の児童・生徒自身の読書興味や読書能力を具体的な形で把握させ、感情・情報の共有化を経験させる読書活動の工夫を継続的に行うことは、情報活用の実践力（P.14 後述）を高め、読書の習慣化（「自ら本を手にとる」子どもを育てること）につながると考えた。

6　研究内容と方法

以上の基本的な考えを踏まえ、研究内容を次の二点とし、各分科会に分かれて検証授業を通した実践的研究を行った。

- 読書への意欲を高め、習慣化を図る指導の工夫
- 「情報活用の実践力」を育てる指導の工夫

7　研究構想図

東京都子ども読書活動推進計画

学習指導要領に示された内容

「これからの時代に求められる国語力について」（H16.2 文化審議会答申）
「これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策について」より

◆　**読書の重要性**

・　読書とは、文学作品を読むことに限らず、自然科学・社会科学関係の本や新聞・雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する本を読んだりすることなどを含めたもの
・　読書は、国語力を構成している「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」「国語の知識等」のいずれにもかかわり、これらの力を育てる上で中核となるもの
・　すべての活動の基盤ともなる「教養･価値観・感性等」を生涯を通じて身に付けていくために極めて重要なもの

◆　**読書指導**

・　「本を読むこと自体が楽しい」という読み方を学校教育の中で教える必要があり、これまでの教育では、読むことの楽しさを教えることに失敗しているのではないかとも考えられる。

学校図書館活動

児童・生徒の学習と人格形成を目的とした、学校図書館で行われる教育活動全般

○　図書、視聴覚資料その他、学校教育に必要な資料・情報の選択・収集・整理・保存・運営
○　読書指導・情報教育等についての個人指導・集団的企画など

研究主題

個に応じた学校図書館活動の一層の充実

目指す児童・生徒像

幅広く自ら本を手にとり、読書を楽しむ児童・生徒

進んで学校図書館を利用し、多種多様な図書資料・情報を必要に応じて活用することができる児童・生徒

■　仮説

児童・生徒自らの読書活動や授業などで活用できるように整備された学校図書館を基盤として、児童・生徒自身の読書興味や読書力を具体的な形で把握させ、感動・情報の共有化を経験させる読書活動の工夫を継続的に行うことは、情報活用の実践力を高め、読書の習慣化につながる。

■　分科会テーマ

〈第１分科会〉
読書への意欲を高め、習慣化を図る
指導の工夫

〈第２分科会〉
「情報活用の実践力」を育てる
指導の工夫

自ら本を手にとる子ども

Ⅱ 研究内容

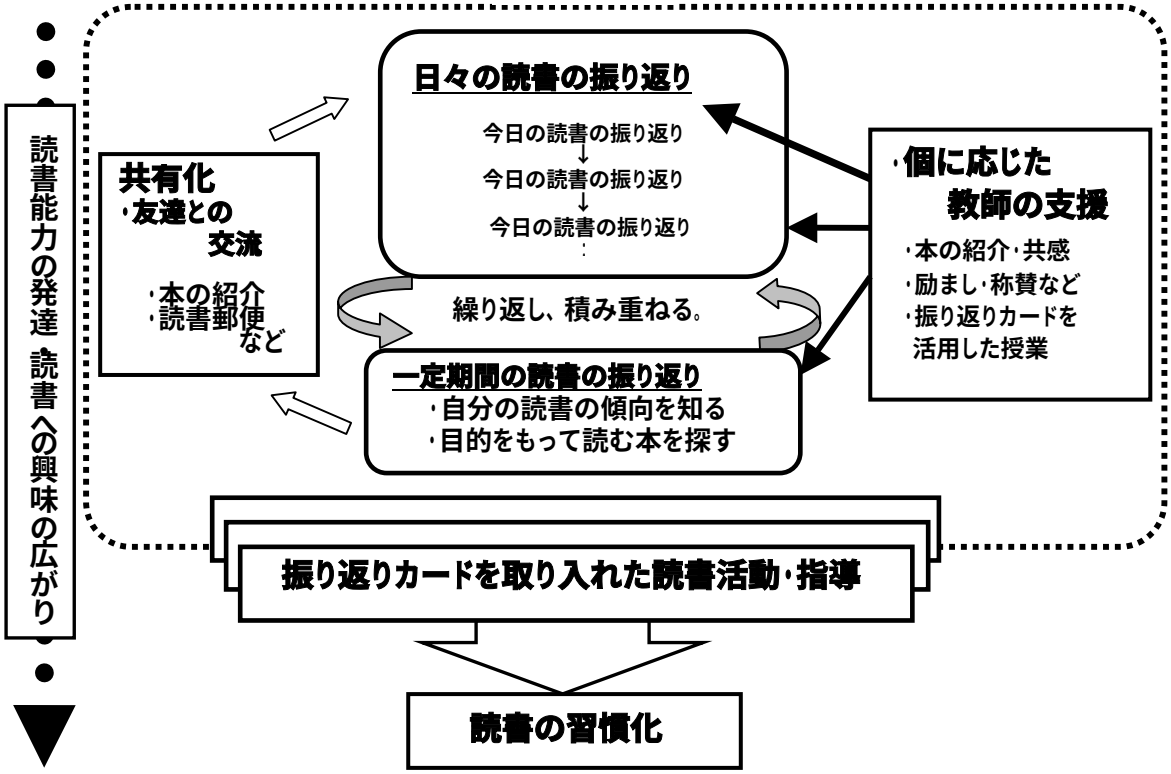
1 第1分科会 読書への意欲を高め、習慣化を図る指導の工夫

（1） 分科会テーマ設定の理由

平成１５・１６年度東京都教育研究員学校図書館部会では、学校図書館の整備や読書のきっかけ作りなどの実践を行い、児童・生徒の読書意欲を高めるという成果を上げてきた。しかし、平成１６年に全国学校図書館協議会が実施した読書調査の報告によると、１ヶ月に１冊も本を読まなかった不読者（以下「不読者」という。）の比率が、学年が上がるにつれ急激に高くなる（小学校４年生男子 7.3%　中学校３年生男子 33.2%　高等学校３年生男子 54.7%）。本分科会では、このように読書意欲が維持されないのは、児童・生徒が読書の楽しさを十分味わえていないことが大きな原因の一つではないかと考えた。読書の楽しさには様々な要素がある。しかし、児童・生徒に自分の読書活動を振り返る機会を与え、教師の適切な個に応じた支援や友達との読んだ本の感動などの共有の結果、児童・生徒が何の本を選びどう読めばよいか気付き、自分自身を高めていけるようになれば、読書の様々な楽しさに気付かせることができると考えた。

振り返る度に、本から得た知識や追体験、感動、友達との共感などが具体的な形で残され、その結果、読書への興味が広がり意欲が維持されて、自ら本を手にとる子どもに育つのではないかと考える。そこで、生徒の読書意欲を維持させるための「児童・生徒の変容を把握しながらの継続的な読書指導」と「児童・生徒の読書の実態把握の方法の工夫」を課題とし、分科会テーマ「読書への意欲を高め、習慣化を図る指導の工夫」を設定した。

＜概念図＞



（２）　研究内容と方法

児童・生徒の読書の実態を踏まえ、本分科会では、「自ら本を手にとる子ども」を育てるために、まず、児童・生徒の読書の姿を詳しく把握する必要があると考え、児童・生徒一人一人の読書記録に着目した。書名を記録することが中心となっている従来の読書記録に、自分自身の読む姿や読み方について振り返る視点を加えた「振り返りカード」を作成し、記録させることにした。

この「振り返りカード」に記入することで、児童・生徒自らが自分自身の読書の姿に気付き、自ら変容することが期待できる。また、記録を基に、児童・生徒が相互に本の紹介をし合ったり、教師が共感、励まし、称賛などの個に応じた支援をしたりすることができる。

振り返りの観点、項目については、次の５つの観点を設定し、各学年に応じて項目数や文言を精選した。（各学年の振り返りカード参照）

①　本の選択……目的をもって本を選んだか。
②　読む姿勢……本の世界に浸れたか。集中して読んだか。
③　読後感……本を読んで新たな発見や出会いがあったか。
④　広がり……読んだことのない本、作者、ジャンルの本を読もうとしたか。
⑤　交流……家族や友達に紹介したいと思ったか。

また、「振り返りカード」を作成するにあたっては、継続して使えること、短時間で記入でき、手軽に書くことができること、教師側が読みとりやすいことの３点を考慮した。

児童・生徒は、この「振り返りカード」を、授業だけでなく、朝読書や家庭での読書など、読書をするたびに、読んだ本の記録とともに記入する。さらに、学期ごと等の一定期間の後、それまでに書きためた「振り返りカード」を、あらためて振り返えり、友達と交流したりすることで、児童・生徒は、自分の読書の姿勢に気付いたり、目的をもって読む本を探したりできるようになる。その積み重ねにより、新たに本の楽しさが広がっていくと考えられる。（P.5＜概念図＞参照）

これら一連の「振り返りカードを取り入れた読書活動・指導」を繰り返す実践、検証を進めることで、児童・生徒の読書能力を高め、読書興味を広げ、研究主題「読書への意欲を高め、習慣化を図る指導の工夫」に迫りたいと考えた。

（３）読書能力と読書興味の発達段階例一覧表　　※読書指導の目安として活用した。

発達段階		歳	学年	読書能力	読書興味	能力に適した本（歳）	本の選ばせ方
入門期 文字学習		2 4		(生活の基本的習慣の自立) 知恵のめばえ	しつけ話・知恵話・美しい心情を育むおとぎ話　【子守り話】	子守り話（2～4） 生活絵本・観察絵本・鑑賞絵本（3~6）	●耳から聞いてことばの数を増やす ●話の筋にとけ込める
	読書レディネス期	5 6	就学前 6歳半頃 迄	お話を聞きたがる 絵本のそら読み	善悪の明確な価値判断に導く身近な素材の想像物語　【昔話】	科学・あいうえお・数・物語絵本（4~6） 日本やｸﾞﾘﾑの昔話（~8）	
	読書開始期	6 7	小１ 1学期末	拾い読み	社会生活のモラルや望ましい行動の手本となる話 【寓話】	昔話 寓話「イソップ」 逸話 実在の偉人英雄の幼年時代のエピソード	○筋のつかみやすい本 ○読む喜びに移れる絵と文が調和している本 ○周りの生活の疑問を解く本 ◆比較的長文のもの
初歩読書期 基礎読書力	独立読書開始期	7	小１ 2学期頃	前後の関係から意味や読み方をつかむ 簡単なものの一人読み			
	読書力習熟期	7 8	小１ ３学期 小２ １学期頃	一語ずつの拾い読み 文意がつかめる 黙読・内語			
	基礎読書力形成期	8 9	小２ ２学期頃 小３	速度が速くなる 黙読による考える読書 読み通す	故意に現実を超えた想像を楽しませ、詩的内容で正義を学ばせるもの 自然や科学の真実に関して手引きする本 【童話】	生活童話 小川未明・ｱﾝﾃﾞﾙｾﾝ 宮沢賢治 初歩科学書　図鑑(8~10) 英雄物語(8~12) 架空物語(9~13) 「ｱﾗﾋﾞｱﾝﾅｲﾄ」 「ｶﾞﾘﾊﾞｰ旅行記」 「一休和尚」など	○活字に慣れ筋の面白い作品 ○筋に変化のある長編もの ○自分の周りのことを考える読み物 ○調べるための本
多読期 技術の成熟・目的に応じた読書	無差別多読期	9 10	小４ 小５ 中頃まで	自発的によく読む 乱読の傾向 読んだことの理解と記憶がよくなる 適書の選択は不十分			
	選択的多読期	10 11 12 13	小５ 中頃から 中１ 末頃まで	自分の必要とする課題の解決のための文献を選べる 内容の評価・鑑賞ができる 速読・精読を資料により使い分ける 男女の読書の違いが生じる 発達が止まり偏った面だけに発達する場合もある	勇気や知的洞察によって解決する過程を描いたもの 少年少女が複数で登場し、社会上の問題を友情と正義で解決する過程を描いたもの （世界の名作） チームワーク、フェアプレイ・弱い者・科学者や偉人　【物語】	少年少女物語(10~3) 少年文学（11~3） 「ﾄﾑｿｰﾔ」 「坊っちゃん」 「宝島」　など 冒険推理物語（11~5） スポーツ物語（12~3） 感傷物語（12~5） 発見発明物語（12~5）	○知識欲を満足させる本 ○興味あるもので考えさせられる内容の本 ○愛情を深める文学的な作品 ○理想に向かう意欲を起こさせる人間としての生き方を考えさせる本 ◆気に入った作者の他の本 ◆発展図書
					人間的苦闘を乗り越えた偉人や英雄の存在から、前途の光明を持たせるもの 夢のような恋愛・冒険等を脚色し描いたもの 科学の入門書【伝記】	史実による伝記（12~5） 伝奇文学（13~） 「ｱｰｻｰ王物語」 「ﾓﾝﾃｸﾘｽﾄ伯」 「ああ無情」など 大衆文学（13~） 科学入門書（13~）	
成熟読書期 読書人	共感的読書期	14 15 16	中２ 高1 末頃まで	共感・感動を求める 多読は減少 繰り返して耽読 読書技術の熟練	内面の心理的葛藤をいかに解決するか考えさせるもの 現実社会の厳しさにくじけない、真剣に取り組んだ人生の中の真実があるもの 【文学】	推理物語（11~5） 感傷物語（12~5） 市井の人々の伝記（12~5） 発見発明物語（12~5） 伝奇文学（13~） 大衆文学（13~） 純文学（15~） 随筆・人生論・幸福論（16~）	○自分で本を選択する ◆長編小説
	個性的読書期	17 18	高2 頃から	大人向きに書かれた本・学術論文を読める 目的、資料の種類に応じ適切な読書技術を使い分ける 思考、評価、比較、統一できる 結果を自分の個性の伸長に役立てる＝成熟の頂点	思想的な背景をもったもの（人生論や幸福論、哲学） 【思索】	宗教書（19~） 学術書（20~） 随筆、哲学書	

（注）表の作成にあたっては、次の文献を参考にした。　●「本と子ども」国土社　合田　修他共著　●「学校図書館通論」学芸図書株式会社　図書館教育研究会　●「図書館奉仕論」理論社　北島武彦　編著

（４）　「振り返りカード」の記入方法と活用の視点

振り返りとは、人が成長していく中で、次の段階へ進もうとする時にとても大切な作業であると考える。その際、児童・生徒の「ありのままの姿を見る」「全体像を見る」ことが大切である。決して、〇印の数を増やすことだけに意識が傾くような指導はしないよう留意する。

① カード１枚ごとに自己評価をさせ、表の上の吹き出しに、新たなめあてを記入させる。教師が発達段階表(P.７)を参考に、ページ数や冊数より、「冒険物語の本を読む」「伝記を読む」といった、本の内容面に関するめあてがもてるよう支援する。

② 分類番号を記入させることにより、児童・生徒の選書の傾向を把握することができる。それにより、個々の読書能力や読書興味に合わせた指導や、読書の幅を広げさせるきっかけとなる指導ができる。

③ 下記のような、児童・生徒にもわかりやすい分類表をカード裏面に印刷し、自分で分類できるようにした。本の探し方等の図書室利用指導につなげることができる。

④ 振り返りカードに読んだ本を記録しておくことにより、児童・生徒自身が、紹介したい本を選びやすく、読書紹介の活動に役立つ。

⑤ 振り返りカードを継続し、書きためていく中で、児童・生徒の読書意欲や興味の変容を見取り、個に応じた支援を行うことができる。

⑥ 振り返りカードの記入状況から、読書の苦手な児童・生徒が浮き彫りになるので、積極的な支援をしていく。また、選書が困難な児童・生徒には過去に読んだ本から、関連したシリーズや同一の作者などを選び、教師が具体的な声かけをすることが容易である。

読書ふりかえりカード（高学年）　年　　組（　　）

ここには、前の振り返りカードを生かして、読書のめあてを書くようにする。

＊あてはまるなあ…と思ったら、〇印を付けておきましょう。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
読んだ日	読んだ本の名前	作者	分類番号	ページ（全部読み終わったら〇）	読みたい本を選ぶことができたよ。	じっくり本が読めたよ。	お気に入りになりそう。	考えを広げたり深めたりすることができたよ。	新しい出会いがあったよ。	一言 ・登場人物 ・気に入ったところ ・ちょっとした感想 ・次に読みたい本の名前
／										
／										

読書する度に、記入していく。

次に読むページがわかるよう、読み終わったページを書いておくとよい。

⑥⑦⑧⑨⑩の項目は、全部に〇印がつくとよいというものではなく、当てはまるときだけ記入するよう事前に確認しておく。

自由に記入。ただし、⑧や⑨に〇印が付いた子は、その内容を具体的に記録させておくと、今後の支援に役立つ。

児童・生徒に分かりやすい本の分け方（例）

0	調べる本	辞書　図鑑　パソコン	6	産業	交通　通信　農・林・水産業　工業
1	心の本	占い　生活　悩み	7	芸術	音楽　体育　図工　劇　ゲーム
2	歴史・地理	伝記・人物　日本や世界のこと　地図	8	言葉	言葉遊び　作文　外国語　日本語
3	社会	わたしたちのくらし　政治　民話	9	詩・物語	日本の話　外国の話
4	自然・科学	算数　理科　植物　動物	E	絵本	日本の話　外国の話　知識
5	技術・家庭	乗り物　料理・手芸　建物			

（５）　検証授業

①　単元名「本と友だちになろう」（国語科　小学校３学年　光村図書）

②　単元の目標〔国語科〕　※ゴシック体は読書に関する項目

関心･意欲･態度	**外国の話に興味をもって読もうとする。** **自分の読書活動を振り返ったり、友だちと感想を伝え合ったりして読書の幅を広げようとする。**
書く	読み手に本のおもしろさが伝わるように、本の帯の書き方を工夫する。
読む	登場人物の心の動きや情景を豊かに読み取ったり、音読したりする。 **図書室での本の探し方を知り、読みたい本を探して読む。**

③　評価規準〔国語科〕

関心･意欲･態度	**日本の話と外国の話という分け方を知り、外国の話に興味をもって読もうとしている。** **振り返りカードを活用して、読書の幅を広げようとしている。**
書く	読み手に本のおもしろさが伝わるように、本の帯の書き方を工夫している。
読む	登場人物の心の動きや場面の情景を豊かに読み取り読み取った内容が伝わるように音読している。 **本の分類について知り、それをもとに読みたい本を探している。**

④　本分科会の研究テーマとの関連

国語科では、小学校１，２年生で、楽しんで読書しようとする態度を育てることを目標とし、昔話や日本と外国の絵本などの易しい読み物に親しんでいる。それをふまえて、３，４年生からは幅広く読書しようとする態度を育て、読書の量的な向上と普段あまり触れ得なかった分野への関心を広げるということを目標としている。本単元は本の探し方を学習するという初めての読書単元である。「三年とうげ」は朝鮮半島に伝わる民話で、物語の世界を楽しむことができる教材である。この教材を発端として、以下の活動を計画する。

①「日本の話」「外国の話」という分け方を知り、本の探し方を理解する活動

②「外国の話」を読むという目的をもって本を読む活動

③友達と感想の紹介をし合う活動

そして、これらの活動を「振り返りカード」で支援する。カード活用の視点は次の通りである。

ア	振り返りカードの分類番号と本の選択の項目に注目させ、児童に自分の読書活動を振り返らせる。
イ	振り返りカードの交流と書名の項目に注目させ、振り返りカードから紹介したい本を選ばせる。
ウ	本を選べない児童には、振り返りカードから教師が個々の児童の読書の実態をとらえ、適切な本の紹介をしたり、読書の目的を意識させる言葉かけをしたり個に応じた支援を行う。

さらに本単元では、「外国の民話」を読むことによって、「民話を読みたい」「もっと他の国の話が読みたい」「お話の国のことを知りたい」といった興味の深まりや読書の分野の広がりが期待できる。

このように、「三年とうげ」をきっかけに「外国の話」という分野を意識させて本を選び、読書の幅を広げるとともに、話のおもしろさを友達と伝え合うことで読書への興味を深める学習となるように本単元を設定した。

⑤　単元の指導計画（１２時間扱い）

	活動内容	○指導上の留意点（●は幅を広げる）◎評価規準
1 ～ 6	「三年とうげ」を読み取る。	○登場人物の心の動きや場面の情景を読み取らせたり、音読させたりする。 ◎登場人物の心の動きや場面の情景を想像豊かに読み取ったり、音読したりしている。（読）
7 ～ 9	本の帯を作る。	○振り返りカードの中から選ばせる。 ○本のおもしろさが友だちに伝わるように書くことを意識させる。 ◎読み手に本のおもしろさが伝わるように、書き方を工夫している。（書）
10 11 12	・分類番号による本の探し方を知る。（1） **・外国の話を選んで読む（本時　1）** ・外国の話を読みおもしろいところを友だちに紹介する。（1）	○クイズ形式で図書室の本の分類と配架について理解させる。 ○振り返りカードで自分の読書傾向に気付かせる。 ●物語や絵本には、日本のものと外国のものがあることを確認させる。 ●外国の話を読むことをめあてに本を選んで読ませる。 ○話のおもしろさを共有させる。 ◎図書室での本の探し方を知り、読みたい本を探して読もうとしている。（読） ◎外国の話に興味をもって読もうとしている。（関） ◎自分の読書活動を振り返ったり友だちと感想を伝え合ったりして、読書の幅を広げようとしている。（関）

⑥　本時の活動

（ア）本時の目標

・振り返りカードを通し、自分の読書傾向に気付く。

・「外国の話」を読むというめあてをもって本を選んで読む。

（イ）本時の展開

	活動内容	○指導上の留意点（●は幅を広げる）◎評価規準
導入	**1　振り返りカードで自分の読書活動を振り返る。** ・めあてをもって本を選んでいるか確認する。 ・どんなめあてで選んだか、理由を発表する。 ・分類から、自分がどんな本を読んでいるか考える。	○本の選択の項目に目を向けさせる。（振り返りカード項目⑥） ●⑥に○をつけた児童に、本を選んだ理由を紹介させる。 ○分類に注目させ、「9」と「E」が多いことに気付かせる。（振り返りカード項目④）
展開	**2　「外国の話」に興味をもつ** ・今まで国語で学習した話を思い出す。 三年とうげ　おおきなかぶ お手紙　くじらぐも　等 ・グループ分けされた話を見て、どういう仲間分けかを考える。 ・地図に貼られた題名を見て、外国の話がたくさんあることを知る。 ・自分の振り返りカードを見直す。	○今までに学習した話を「日本の話」「外国の話」に分けて示し、どういう観点で分けたかを考えさせる。 ○どこの国の話かわかるように、世界地図上に貼っていく。 ○作者に注目させ、日本の話が多いことに気付かせる。（振り返りカード項目③） ◎振り返りカードを通し、自分の読書傾向に気付いたか。（関）
	3　外国の話を選んで読む。 	●本時は外国の話を選んで読むことをおさえる。 ●本を選べない児童には、振り返りカードの読書傾向をもとに適切な本を紹介する。 ・読みたい本を選べない ・じっくり読めない ・短い本ばかり読んでいる ◎　「外国の話」というめあてをもって本を選んで読んでいるか。（関）
まとめ	**4　今日の読書の振り返りをする。** ・振り返りカードに記入する ・友達に紹介したい本を発表する。 ・次時の活動を知る。	○「しょうかいしたいな」に○をつけた児童に、題名・作者、紹介したい理由を発表させる。（振り返りカード項目⑩）

⑦　資料「中学年振り返りカード」

読書ふりかえりカード　3年 1組（　　）

本をたくさん 読む。

＊あてはまるなあ…と思ったら、○印をつけておきましょう。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
読んだ日	読んだ本の名前	作者	分類番号	ページ（全部読み終わったら○）	読むのがはやかったよ	文章がすらすら読めたよ	この本を読みたかったよ	だれかにすすめたいと思ったよ	ひとこと・とくじょうしたなあう・気に入ったところ・ちょっとしん長番・次に読みたい本の名前
10/5	きょうりゅうのおやかすもさがせ	三田村信行	9	75	○	○	○	○	登場人物の名前がおもしろい
10/12	かいけつゾロリのちきゅうさいごの日	原 ゆたか	9	85	○	○	○	○	ほかのシリーズがのってた。
10/18	プカプカチョコレート島めざせ宝島	原、ゆたか	9	31つづき	○	○	○		つづきをよみたい。
10/19	わかったさんのクッキー	寺村輝夫	9	79	○	○	○	○	つくりかたが書いてある。
10/20	シートンどうぶつ記	シートン	9	100	○	○	○	○	すごくかなしい。

〈考察〉仮説に基づき、振り返りカードによって、自らの読書活動を客観的に振り返らせることで、次のような成果を得た。

ア　読書傾向に気付かせ、項目⑥に○印の付いた児童に本を選んだ理由を紹介させたことで、本選びに時間のかかっている児童に対しては、選び方の視点を意識させることができた。また、○の付いた児童には、選択の幅を広げさせることができた。

イ　振り返りカード記入後に、項目⑨に○印を付けた児童に理由を発表させた。この項目は、紹介したいという意思をもたせるのに有効で、単に「楽しかった」という感想でなく、具体的な感想や気に入った場面を紹介するなどの深まりのある感想が得られた。

ウ　読書のめあてが明確化されたため、ほとんどの児童が意欲的に本を選ぶことができた。それにより、今まで本選びに困っていた児童に教師が積極的に関わっていくことができた。

エ　作者の欄から、外国の本を意識させることによって、日本の話と外国の話という種類が整理され、本を選ぶ上での新たな視点をもたせることができた。

オ　振り返りカードを記入した上で、読んだ本を紹介することで、勇気、優しさ、平和など、人間としての普遍的なテーマに気付かせるきっかけとなった。

（６）　小学校「振り返りカード」の活用例

①　　小学校低学年

ア　低学年では、作者とページ数の項目を減らし、記入しやすくしている。

イ　カードの項目⑤になかなか○印を付けられない児童は、一人読みが困難な場合があるので、部分的に読み聞かせを行ったり、友達と一緒に読ませたりする支援が可能である。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
よんだ日	よんだ本のなまえ	本のしゅるい（いろやばんごう）	よみたい本を見つけられたよ。	字やえをじっくりよめたよ。	たのしみながらよめたよ。	だれかにおすすめしたいな。	ひとこと ・でてくる人やどうぶつ ・きにいったところ ・つぎによみたい本 ・だれにすすめたいか などを書こう。
／							

② 中学年　※前ページ⑦　資料「中学年振り返りカード」参照

ア　作者の欄を設けて、シリーズものや作者への興味をもたせるようにした。

イ　長編の本に対応できるように⑤ページ数記入欄を設けた。読書月間等に「何ページに挑戦しよう」と目標を決めて取り組むことで、達成感による意欲を喚起することができる。

③ 高学年

ア　高学年になると、読むジャンルやテーマが広がり、主人公の生き方に共感したり、新しい知識を得たりする。そこで、「考えを広げたり深めたりすることができたよ」の項目を設定した。

イ　今までに読んだ本から感想文を書く際には、⑧⑨⑪などをもとに取り組むことができる。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
読んだ日	読んだ本の名前	作者	分類（ぶんるい） 番号（ばんごう）	ページ（全部読み終わったら〇）	読みたい本を選ぶことができたよ。	じっくり本が読めたよ。	お気に入りになりそう。	考えを広げたり深めたりすることができたよ。	だれかに紹介したいな！	一言 ・登場人物 ・気に入ったところ ・ちょっとした感想 ・次に読みたい本の名前
／										

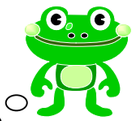
④ 授業での活用例

活動名	内容	参照するカードの項目例		
		低学年	中学年	高学年
ひとことスピーチ	振り返りから心に残った本を選び、感想や内容、どこで見つけたかなどを簡単に紹介する。	④⑥⑦⑧	⑥⑧⑨⑩	⑥⑧⑨⑩⑪
本あつめ	「動物が出てくる本」・「食べ物が出てくる本」など、今まで読んだ本を分類してブックリストや学級文庫を作ることにより、興味をもって次に読みたい本を選ぶことができる。	②　⑧	②　⑩	②　⑪
読書郵便・しおり作り	気に入った本の紹介文を書き、手紙やしおりにして友達に渡す。異学年での交流もできる。	⑥ ⑦ ⑧	⑧ ⑨ ⑩	⑨ ⑩ ⑪
おすすめランキング	紹介したい本のリストを作ったり、グループでブックトークをしたりして交流する。	⑦	⑨	⑩
好きな作家をさがそう	今まで読んだ本から好きな作家をさがし、ブックリストを作って友達と交換することで、本の選択の幅を広げる。	／	② ③ ⑧	② ③ ⑧
読書新聞	「好きな作者」や「お気に入り」、「新しい出会いがあった本」などを記事にする。	／	／	⑦⑧⑨⑩

国語科学習課題

読書ふりかえりカード

組	番氏名



□ 月の私の本棚

・今月読んでみたい本（目標）を記入しましょう。
・漫画、雑誌、辞典類以外とします。

①書名　　著者名

②書名　　著者名

③書名　　著者名

今月読んだ本　　＊読んだ本ごとに下の欄に記入しましょう。

1	2	3	4	5	6
本の番号	日（曜）	分類番号	読み終えた ○ 途中 △ あきらめた × 読まなかった ／	おすすめ度 ☆☆☆☆☆ 五段階評価でぬる	一　言
①	（　）			☆☆☆☆☆	
②	（　）			☆☆☆☆☆	
③	（　）			☆☆☆☆☆	
④	（　）			☆☆☆☆☆	
⑤	（　）			☆☆☆☆☆	
⑥	（　）			☆☆☆☆☆	

本棚の本（目標）以外で関心をもった本

④	書名	著者名
⑤	書名	著者名
⑥	書名	著者名

先生から

（7）中学校・高等学校「振り返りカード」の活用例　※カードは両面を活用する

活用のしかた	①　中学生・高校生になると、生徒たちをめぐる読書環境は大きく変化する。小学校と比べ授業時間を使っての継続的な読書指導は難しいため、中学生･高校生には、日常生活の中に、自主的に読書の時間を組み入れていくよう指導することが必要となる。 ②　読書の意義を伝え、読書意欲を喚起させるなど十分な動機付けを行い、さらに、一年を通じて読書を継続化させるための手だてとして活用するとよい。振り返りカードは、月に一枚ずつ用い、各月の状況を振り返りながら、翌月の読書に生かす。 ③　授業時間に用いるものではないことと、選ぶ本も長編となり、読み終わるまでに長時間を要するものが多くなることから、「一冊読み終わるごと」に記入する形式とした。 ④　使用の際は、指導者による定期的な点検が欠かせない。必ず月１回は（できれば２回）はカードを提出させ、生徒各自の状況を把握し、適切な助言を与えるようにする。生徒にとって、指導者からの励ましや助言は、自らの読書生活の振り返りとともに、読書に向かう意欲を高め、習慣化を促すものとなるからである。
記入のさせかた	①**「□月の私の本棚」（目標）の欄　（読書前）** その月に読んでみたい本を２、３冊選ばせて記入させる。(「**本の選択**」)　選書のために、前の月のカードを振り返って自分の読書傾向を見つめることや、話題の本や周りの人の「お薦めの本」などに日常的に関心をもつような支援、指導を工夫する。（授業例参照） ②**「今月読んだ本」の欄　（一冊読み終わるごと）** ア　**「日(曜)」**の欄は、「読み終わった日（または記入する日）」を記入させる。 イ　**「分類番号」**の欄は、日本十進分類表による番号の記入欄であるが、図書館以外の本の場合は、裏面掲載の「分類表」を参考に記入させる。 ウ　**「読み終えたか」**の欄は、〇印が付くように励ましたい。集中して最後まで読み切ることにより次の本に向かう意欲がわいてくる。(「**集中**」)　また、×や／の記録こそ読書生活を振り返らせる材料となる。翌月以降の読書目標を立てるときの参考になり、自分の読書能力を客観的に把握することができる。（教師は読書能力に適した本を助言する。） エ　**「おすすめ度」**欄は、ポイント式評価により中学生･高校生でも楽しんで取り組める点が重要である。高い評価の本が自他共に識別が容易で、人に薦める際に便利である。(「**交流**」) オ　**「一言」**欄は、簡単な読後感や備忘のための記録欄として使用させる。書きためた記録を振り返ることで、自分自身の心の成長を知ることができる。(「**読後感**」) ③**「本棚の本以外で関心をもった本」**の欄 様々な「読書案内」や周囲のお薦めによって読んでみたいと思った本の書名、著者名を随時記録する。翌月の読書目標を立てるとき役に立つ。（「**広がり**」）
裏面活用例	**①「アンソロジー」**（読書の楽しみや新しい発見を意識付ける欄） 読んだ本の中に心に残る文章や好きな言葉を発見したら書き抜いておく。抜き出すだけなので書きやすく、まとめて自分だけの「名句名文選集」などを作ることができる。 **②「日本十進分類表」**（実態に応じて簡略化したもので、資料検索法・分類を意識付ける欄） **③「作品テーマ一覧」（テーマの項目は実態に応じて作成）**を載せ、「分類番号」の下にそのテーマを記入させるのもよい。（読書の幅を広げさせたいときの振り返りに有効な欄）
授業例	①　今月のミニブックトーク　　②　出身小学校への読書郵便　　③　読書新聞作り ④　五つ星図書読書会（高評価の本や「ｱﾝｿﾛｼﾞｰ」を参考にお薦めのページを読み合い次に読む本を選ぶ）　　⑤　五つ星図書朗読発表会（名文・名場面などを抜粋し朗読発表する） ⑥　お薦めブックリスト（学級・学年単位などで作成し、下の学年にプレゼントする）

２　第２分科会　「情報活用の実践力」を育てる指導の工夫

（１）　分科会テーマ設定の理由

平成１５・１６年度東京都教育研究員学校図書館部会では、学校図書館を活用した学習として「調べ学習」を取り上げ、図書やインターネット情報などの資料を十分に活用するための実践・検証を行い、成果を上げた。しかし「調べ学習」では、児童・生徒が課題を自分自身の問題としてとらえられず、興味・関心がもてないまま学習に取り組んでいる姿や、図書やインターネット情報等の内容を丸写しするだけになることが見受けられた。児童・生徒が主体的に調べたいと思える課題設定をしていくことが、学校図書館活動の充実につながっていく。そのためには、個々の児童・生徒の興味・関心に応じたきめ細かな指導・支援が必要である。

文化審議会答申(平成１６年２月)にも「自分でものを考える必要があるからこそ読書が一層必要となる」とあり、学校図書館を学習情報センターとして活用し、主体的に課題を解決しようとする児童・生徒の育成が必要とされている。そして、その課題解決の過程で、学校図書館を活用し、多種多様な情報・資料の収集を主体的に行うことが、自らの調査の裏付けとなり、児童・生徒の「何かを得る喜び」を引き出すことにつながっていく。

さらに、自分が得た情報を発信し、児童・生徒同士が交流することで、自分の調べたことの価値をより深めたり、新たに調べてみたいと思える課題に出会ったりすることが可能となる。これらの活動に必要な力が「情報活用能力」であり、日常生活の中でもそれらの力を発揮できる実践力が求められていると考える。

そこで、分科会テーマを「『情報活用の実践力』を育てる指導の工夫」と設定し、その手だてとして７つの学習過程の段階をふむことが有効ではないかと考えた。

（２）　研究内容と方法

本分科会は、「情報活用の実践力」を育てる観点から、学校図書館を活用した学習活動と学習支援の流れを再検討し、課題設定から決定までの過程と学習成果の発信と共有化に重点を置いた。そこで、児童・生徒が情報を主体的に収集・選択し、興味・関心を常にもちながら「調べ学習」をするための指導方法を検討し、「情報活用の実践力」を育てる開発研究を行った。

本分科会では、学習情報センターとしての学校図書館の活用を前提に、「情報活用の実践力」を次の５つの力からなると考えた。

ア　課題を設定・決定する力
イ　情報を収集する力
ウ　情報を整理する力
エ　情報を発信する力
オ　情報を仲間と共有し、発展させる力

そこで、これらの５つの力を習得するための具体的な学習過程をまとめてみると、次の７

つの学習過程の段階をふむことが望ましいと考えられる。

① 課題（仮テーマ）を設定する

② 学習の見通しを立てる

③ 資料・情報を集め、記録し整理する

④ 課題（本テーマ）を決定する

⑤ 集めた資料・情報を本テーマに沿って、取捨選択する

⑥ 考察・感想をまとめ、発表する

⑦ 学んだことを共有し、新たな課題へとつなげる

この７つの学習過程の中で、特に①～④の段階で、十分に学校図書館を活用し、インターネット等で得た情報と合わせて、児童・生徒の興味・関心に応じた価値のある本テーマを練り上げていく。

また、この学習過程において、児童・生徒の活動が円滑に行われるように次の点に配慮し、手だてを工夫した。

テーマ設定の明確化

○課題（仮テーマ）発見のためのウェビング図（資料１）の活用

○思考・判断のためのフローチャート（資料２）の作成

○記録カード（資料３）、資料リストの活用（資料４）

○仮テーマにあわせた個別への支援と図書等の準備

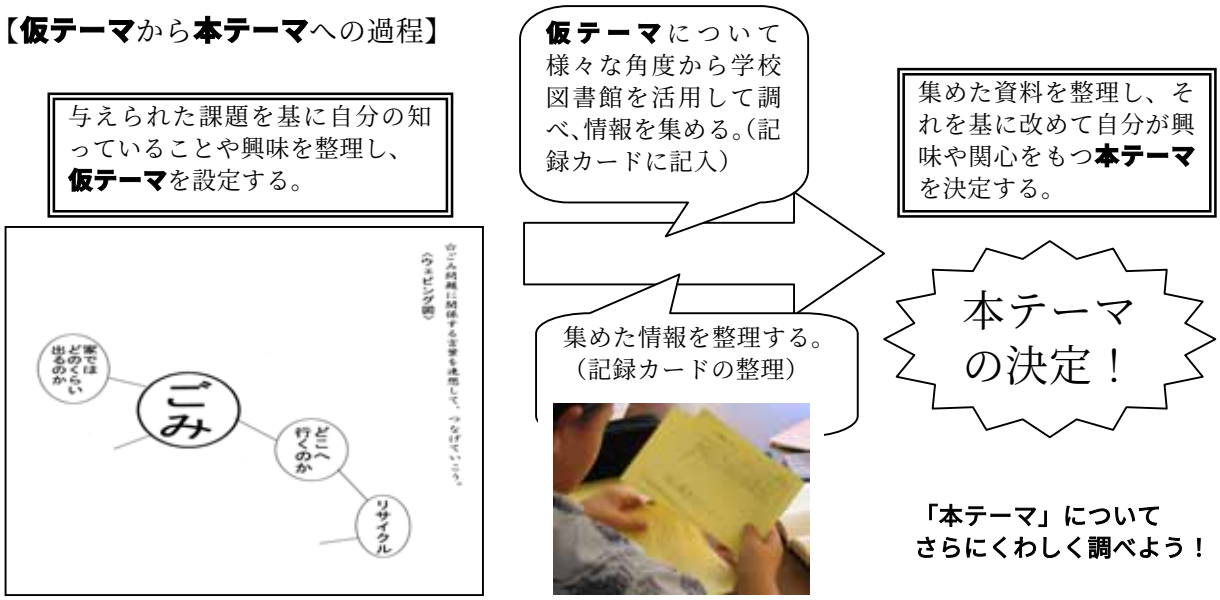
○公共図書館の利用

学んだことの共有化

○聞き取りメモ（共有のためのシート）の作成（資料５）

この学習過程の中で、その時々の課題設定のための指導と調べたことを自分の言葉で表現し、発信し、共有化させるための指導に重点を置き、検証授業を行った。

【仮テーマから**本テーマ**への過程】



(資料1）課題(仮テーマ)発見のためのウェビング図

（３）検証授業

①　単元名　　人と「もの」との付き合い方　(国語科　小学校５学年　光村図書)

②　単元の目標

資料「ごみ問題ってなあに」をきっかけに、自分なりの課題をもって調べ、発表して交流し、まとめようとして書くことを通じて、自分の生活の中での「もの」との付き合い方を見直す。

③　評価規準

【国語科】

関心	・自分と「もの」との付き合い方を見つめ直し、活動を通して考えを深めようとしている。
話す・聞く	・自分の課題について調べた内容や感想が友達にわかるように、組み立てを工夫して話している。 ・友達の考えと自分の考えとの違いや共通点を明確にして発表を聞き、考えを深め、新たな課題を作っている。
書く	・友達の考えと比べながら自分の考えを明確にし、文章全体の組み立ての効果を考え、事実と感想・意見を区別して書いている。
読む	・自分の考えを明確にするために、必要な箇所を読む。

【情報活用能力】

情報活用の実践力	課題に必要な情報を収集・選択・整理し、発表することを通して、新たな課題をもち、日常生活の中で解決していこうとする。

④　分科会研究テーマとの関連

本単元は、５年生の児童がこれまでに積み重ねてきた課題追究学習の一つの到達点として位置付けられている。説明文を読むことで出てきた興味や関心をもとに、自ら課題を設定し、それを調べて発表を行う。その発表を通じて友達の考えと自分の考えを共に深め合い、**新たな課題**をもつ単元である。

「ごみ問題」について、まず**課題(仮テーマ)**を設定した。学校図書館を中心とした調査活動で集めた資料を基に、児童自身が本当に調べたい**課題(本テーマ)**に出会わせた。このことにより、無理なく調査活動を行い、意欲も高めることができると考えた。また、調査計画立案時から、個別に確認し、見通しをもって活動できるよう一人一人に合った支援を行った。

発表会では、同級生の発表を聞くことを通して、自分の考えとの違いや共通点に気付かせる。多様な視点から自分の生活を見つめ直し、考えを深め、**新たな課題**をもたせたい。

以上のように、**仮テーマ設定から本テーマ決定の過程**に重点を置き、児童自身が本当に調べたい課題に迫っていくことで、「情報活用の実践力」を高めることができると考えた。

⑤　指導計画(１６時間扱い)

次	学習活動	時	○指導上の留意点・支援　▼情報活用の支援　☆評価規準
1	・資料を通読し、人と「もの」との考え方について考え、自分の生活に照らして感想をまとめる。	2	○生活体験を想起させながら、課題意識をもたせる。 **☆環境問題について、興味や関心をもっている。**
	・「ごみ問題」について、自分の生活を振り返りながら、調べてみたい**課題(仮テーマ)**を考える。	1	○「ごみ問題」について関心が高まるよう、関連する絵本を読み聞かせする。 ○資料を参考に▼ウェビング図を作らせる。 ○▼自分の課題を見付けようカードを使って学習の見通しを立てさせる。 **☆主体的に課題(仮テーマ)を設定している。**
	・適切な情報手段を考え、学習計画を立てる。	1	○***課題(仮テーマ)***について、調べる方法を考え、学習結果の予想を立てさせる。 ○情報手段(図書・インタビュー・インターネット他)の特性に気付かせる。 **☆進んで学習計画を立てている。**
	・計画にしたがって調査活動を行い、結果を▼記録カードにメモする。	2	○学校図書館では、児童の学習計画を参考に、関連する図書をまとめて排架しておく。 ○近くの区立図書館に、関連する資料を児童と借りに行っておく（団体貸出）。 ○資料として利用できるインターネットサイトへのショートカットをフロッピーディスクにまとめ、貸し出す。 ○実態調査を行った場合も、可能な限り図書やインターネットからその裏付けを取らせる。 ○一つの事柄に対して、複数の資料を参照させる。 ○資料はその出典を▼資料リストにまとめさせる。 ○興味のあるテーマが変わったら、自由に変更してもよいことを伝える。 ○必要に応じて個別指導を行う。 **☆複数の情報を読み、適切なものを選択している。** **☆進んで資料を集め、図書資料やインターネットを活用して、資料の裏付けを取っている。**
2	・集めた資料を整理し、それを基に改めて自分が興味や関心をもつ**課題(本テーマ)**を決定する。　**(本時)**	1	○集めた資料を生かせるような課題を決定できるよう助言する。 **☆資料を基に、自分の興味や関心にあった課題を決定している。**
	・**課題(本テーマ)**について調査活動を行う。	1	☆課題に基づいて、計画を立てて調査している。

2	・自分の意図が明らかになるように組み立てを考える。 ・調査結果を整理して、発表用資料を作成する。	2	○意図が伝わるような話の組み立てを工夫させる。 **☆意図に合わせた組み立てをしている。** ○聞き手に伝わるように意識させる。 **☆▼記録カードを元に、発表用の資料を効果的に作成している。**
3	・発表会を開き、友達の発表と自分の課題や考えとを照らし合わせ、意見交換する。 ・深まった自分の考えと自分の生活の**新たな課題**を文章に書く。	2 4	**○▼共有化のための聞き取りメモ** **☆自分の課題や考えと比べながら他の人の発表を聞き、考えをより広げたり、深めたりしている。** ○意図が明確に伝わる文章を書くようにする。 **☆自分の考えと友達の考えを比べ、自分の生活を見つめ直し、事実と感想・意見を区別しながら、自分の考えや新たな課題が明確になるように組み立てを考えて、文章を書いている。**

⑥　本時の活動(第２次　第１時)

（ア）本時の目標

・集めた資料を整理し、それを基に、改めて自分が興味や関心をもつ課題を決定する。

（イ）本時の展開

活　動　内　容	○指導上の留意点・支援　**☆評価**
・前時までに集めた資料を基に、**課題(本テーマ)**を設定することを確認する。 **自分の課題（本テーマ）を決めよう！**	
・資料を記入した記録カードを見返し、整理する。	**☆記録カードに書かれている内容毎に、情報を整理できている。** **○記録カードを見返し、疑問点等がある場合は、再度図書資料等を見るよう助言する。**
 ・記録カードを読み、発表に向けた**課題(本テーマ)** を決定し、結果を予想する。	○**課題(仮テーマ)**と同じでもよいことを確認する。 ○**課題(本テーマ)**がまとまらない児童に助言をする。 **☆主体的に課題(本テーマ)を決定している。**
・前時までの活動を振り返りながら、調べる計画を考える。 	○前時までの調べる活動を想起させる。
・**課題(本テーマ)**と調べる計画を発表し、それぞれの経験を基に役に立つ資料をアドバイスし合う。	○友達との相違点・共通点に気付かせる。 ○互いを尊重し合ってアドバイスし合えるよう支援する。
・友達の計画やアドバイスを基に、次時までにしておくことを再確認し、調査計画を修正する。	○ワークシート **☆アドバイスを基に具体的な計画を立てている。**

（４）　検証授業の考察

①　仮テーマから本テーマへ　― 課題に主体的に取り組ませる工夫 ―　の成果

従来の課題解決学習では、一つのテーマを個々に調べ、個々にまとめるという活動が見受けられた。しかし、ここでは範囲の広い「仮テーマ」を設定し、まず広く学校図書館の資料に当たらせた。様々な切り口の学校図書館の資料で調べる中ではじめて、これこそをもっと調べたいと自分なりの価値や感性に合った課題を見つけ、独自の「本テーマ」が設定されていった。

②　情報収集における相互補完　― 一人調べを越えさせる工夫 ―　の成果

自分なりの切り口や視点をもって情報をさらに収集したいという時に、「そのことならこの本に載っているよ」と学級の中で交流させることにした。友達からの情報提供は調べる意欲を高め、発信することを意識して情報を整理していくことが、意欲を持続させることとなった。発信が説得力のあるものとなるよう、インターネットで情報を得、図書資料で裏付けを得たり、根拠に正確さをもたせようと図書資料の数値の最新のものを調べるためにインターネットで調べたりするという過程を経験させるようにした。

③　情報の交流と視点の転換　― 自分の活動に有用感をもたせる工夫 ―　の成果

発表会ではメモをとりながら相互交流し、児童は共感して同じだと感じたり、違う驚きで受け止めたりしていた。例えば、「生ごみ」として分別さえすればよいと考えていた児童は、視点の転換が図られ、「資源」として活用できることを知って、新たな課題をもつに至った。自分の考えと他の考えを対比させて文章にすることもでき、自分が学校図書館で調べたことが、互いの考えを深めることにつながる経験をもたらすことができた。

④　課題

学校図書館を利用し、進んで活用する上で、断片的な情報を受けとるのではなく、自分でものを考える必要にかられるように、活動の内容と段階、相互交流に工夫を試みた。学校図書館の資料に意図的に触れさせ、価値のある情報を発信し交流する中で、「自ら本を手にとる子ども」になっていくのでは、という仮説に対し、集めた情報を整理・発信させるときの、個に応じた支援をどう深めていくかという点が今後の課題である。

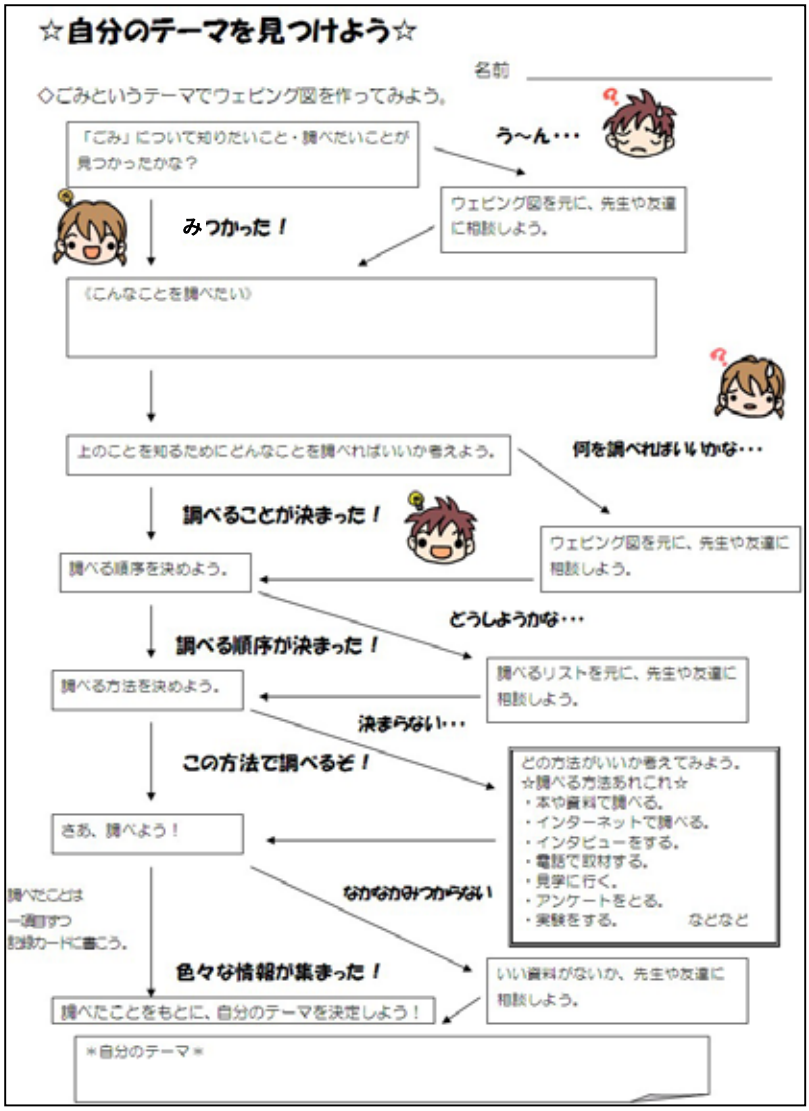
＜考察資料：課題の変遷表＞

・１６人中６人の児童が、本テーマを決める段階で課題を変えた。主なものを下記に紹介する。

・自分で調べたことと友達の発表から分かったことをすり合わせる中で、新たな課題をもつことができた。

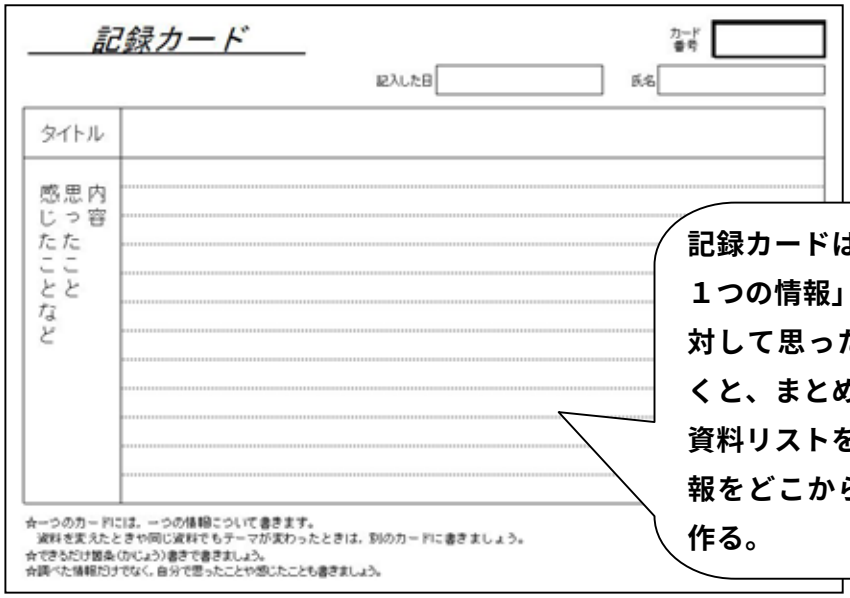
課題(仮テーマ)	途中で検討したテーマ	課題(本テーマ)	(テーマ変化の理由)	新たな課題
処理したごみは何になるか	→	みんなでリサイクル	(視点の転換)	今よりもっとリサイクルし、ゴミを出さない社会を作りたい。
紙のリサイクル	リサイクルしたものは何になるか	プラスチックのリサイクル	(興味の変化)	プラスチックをすぐに捨てず、ちゃんとリサイクルする場所に捨てたり、一回使い終わったペットボトルでも、お茶・水を入れるなど活用して長持ちさせたい。
生ゴミはどこへ行ってどう処分されるか	→	肥料になる生ゴミ	(焦点化)	生ゴミを肥料にして植物を育てたい。「コンポスト」という機械のことをくわしく調べてみたい。
埋立地の工夫	→	東京２３区のごみの量	(仮テーマ調査困難)	ものを捨てる前に、何かに使えないかと考えてみるだけではなく、ポイ捨てをしないようにすれば川や海・町は汚れないので、そのようにしたい。

(資料２)　思考判断のためのフローチャート(本テーマ決定支援)



児童・生徒が、本テーマを決定するまでの流れをそれぞれ考え、判断するためのフローチャート。調べ方の例も示せば、児童・生徒自身で主体的に取り組むことができる。

(資料３)　記録カード



記録カードは、「１枚のカードに１つの情報」を書かせる。内容に対して思ったことも書かせておくと、まとめのときに役に立つ。資料リストを用いない場合は、情報をどこから得たかを書く欄を作る。

(資料４)　資料リスト

資　料　リ　ス　ト　　テーマ～

氏名

図書用

カード番号	記号	資　料　名	著者・編者	発行所・出版社	出版年	のっているページ	資料の場所

インターネット用

カード番号	資　料　名	トップページのURL（http://www.●▲.go.jp のように書く）	トップページからのたどりかた

インタビュー・アンケート・その他調査

カード番号	調べたこと	調査方法(アンケート・インタビューなど)	調査場所	調査方法(簡単に)

資料リストは、記録カードと対応させて書かせる。情報をどこから得たかわかりやすく、整理もしやすいが、小学生にはやや難しいと思われる。児童・生徒の発達段階に応じて用いる。

(資料５)　聞き取りメモ（共有のためのシート）

聞き取りメモ　　**氏名**（　　）

	発見！	思ったこと	ぎ問	その他
「生ゴミの処理の方法は？」	貝がらが消しゴムになるとは！	貝がらの消しゴムがほしい！		
「わが家の３日間のゴミ」	生ゴミ・ビニール・紙・牛乳パックはリサイクルできる。	私もプラスチックをおもちゃにしてみたいです。		
「みんなでリサイクル」	いらないものはフリーマーケットで売れる。	私も子どものころの服を売りたい。		
「現代と江戸時代」	江戸時代には、物を直す店がいっぱいあった。	私もこわれた物を直したい。		
「PETボトル」	ペットボトルは、洋服以外にもリサイクルできる。	ペットボトルを作るには、石油が必要！		

発表会の時に友達の発表を聞きながら、分かったことや思ったことを、整理しながら記入する。このシートを読み返すことで、自分の考えと友達の考えを比べて考えを深め、新たな課題を明確にできる。

(５)検証事例

①中学校における検証授業

今までの調べ学習では、１回課題を決定してしまうと、自分が本当に調べたい課題でなくても、そのまま学習活動を進め、意欲が続かず満足のいく成果を上げられない生徒が見られた。そこで、今回の授業では、第２分科会の研究のポイントである、課題（仮テーマ）の設定から課題（本テーマ）の決定における過程に重点を置いた。

（ア）活動名　　総合的な学習の時間「文化と国際理解」（中学校３年）

（イ）活動のねらい

・課題（本テーマ）決定までの時間を確保し、自分の本当に調べたいことを見付ける。

・テーマについての情報を十分に収集し、整理し、自分の必要な情報を選択する。

・発表によって学んだことを共有し、次の新たな課題を見つけ、調べる意欲につなげる。

（ウ）活動内容の実際

・学校図書館で「国際理解」についての情報を集め、まず課題（仮テーマ）を設定する。

・仮テーマについて調べる中で本当に調べたいことを見付け、課題（本テーマ）とする。

・本テーマに沿って、学校図書館を中心に、自分の必要とする情報を集め（記録カード５枚以上）、整理、選択する。それを基に自分の言葉で考察、感想等をまとめる。

・お互いに調べたことを発表し合い、疑問に思ったことや新たに考えたこと、さらに調べてみたいこと等を確認する。

②高等学校における検証授業

高等学校においても同様に、個々に対応した情報活用の実践力を育成するための指導を工夫し、学校図書館が学習情報センターとして調べてわかることのおもしろさを実感する場となる授業を展開する。

（ア）対象学年、教科、単元

３年生選択科目（20 名）、国語表現「調べて説明文を書く」テーマ「江戸の伝統工芸」

（イ）単元目標

学校図書館の資料等の活用により、情報を収集・整理、再構築しながら理解を深める。

（ウ）活動内容

・ 課題を設定し、必要な情報を収集する。

・ 調査して理解した内容を文章化し、共有化を図るために発信する。

・ 説明するための小論文を完成させ、新たな次の課題へとつなげる。

（エ）活動内容の実際

1）「江戸の伝統工芸」を共通のテーマとし、各自の課題（工芸品・産業、民俗、歴史等）を仮定するために、ウェビング図を作成し、資料・情報を収集する。

2）フローチャート等の方法で情報を活用し、生徒間で情報交換する。

3）各自、独自のテーマをしぼって決定し、調査する。

4）調査等の結果をもとに小論文を書き、共有化シート等により、相互に評価し合う。

5）各自、関連する次の課題、あるいは、新たな課題を設定する。

③ろう学校高等部国語科での検証授業

ろう学校では、主に学校図書館を「読書センター」として活用することが多く、「学習情報センター」として活用されることはまだ少ない。また、学校図書館図書標準から比べると調べ学習に活用できる蔵書数は多くなく、児童・生徒が利用しやすい図書館整備について各校での検討が必要とされているところである。そこで、学校図書館や公共図書館の団体貸出等を活用し、必要とする資料・情報収集を効果的に行いながら、得た情報の要点を押さえ、自分の言葉で分かりやすく記述する力を高める単元を取り入れた。

（ア）　科目　国語総合　書く「調査と報告」（高等部普通科１年）

（イ）　単元目標

ａ　多くの資料や情報の中から、自分にとって必要な情報を収集する技術や、収集した情報を必要に応じて取捨選択し、整理する技術を身に付ける。

ｂ　分かりやすさを意識しながら､客観的な文章で表現する技術を身に付ける。

ｃ　膨大な情報の中で、より正確で客観的な判断を行うために、自分の知識や考えを点検する方法を身に付ける。

（ウ）　活動内容の実際

ａ　聴覚の障害に起因する課題

ｉ　より多くの語彙を獲得させる

ii　より深い理解力を身に付けさせる

iii　より豊かな言語表現を身に付けさせる

iv　より多様な調査方法を身に付けさせる

ｂ　各シートを使用時の生徒の様子等

シート名	生徒の実態	学習上の課題	聴覚障害に対する配慮・支援事項
ウェビング	課題から連想できる事柄が多くなく、ウェビングに広がりが出にくい。そのため、資料等が見付からなかった時に課題変更が困難になることがある。	生活経験の幅を広げ、情報の獲得量を積極的に増やし、テーマに関連する事項を自ら連想できるようになることが課題である。	テーマに沿って連想するための視覚に訴える資料を事前に準備しておく必要がある。
ﾌﾛｰﾁｬｰﾄ すごろく	課題について一項目調べれば十分と考える。課題に関する資料が見付からない時には、どこから再度始めればよいのか分からないというようなつまずきがみられた。	調査経験を増やし､手順（資料収集方法､確認方法など）について理解を深めることが課題である。	つまずきが見られる生徒には、何を行えばよいのか確認できるように図等で明確に示しておく必要がある。
資料リスト・ 記録カード	獲得語彙数がまだ十分ではなく、資料の内容を細部まで理解することが難しく、調べたい内容に適する箇所を抜き出すことが困難である。	理解できる語彙数を増やし、文章理解を深めることや、ポイントとなる文や語句を抜き出せるようになることが課題である。	個々の語彙数が異なるため、理解した内容やキーワードの確認を随時行う必要がある。
聞き取りメモ (読み取りメモ)	発表者が簡潔にまとめて、説明する力がまだ十分に身に付いていないため、話を聞く生徒は、発表のポイントだけでなく、全てをメモしてしまう。手話と口形の読み取りに集中してしまうので、すぐに疑問点等をメモに書き留めることが困難である。	発表者の言語表現に課題があっても、その中で発見しようとする姿勢と探求心をもてるようになることが課題である。	発表原稿を作成する際に、伝えたい内容の整理と確認を個別に行う必要がある。発表を聞いた後、理解した内容の確認を行う必要がある。

ｃ　報告

ろう学校では、ａのｉ～ivの指導の充実が要求される。しかし、シートを作ることで、各々の生徒がもっている力を最大限に発揮することができ、意欲をもって取り組むことができた。今後このようなシートを用いた授業をろう学校で展開していくことで、語彙や文章表現等の確認を指導者が行いやすくなり、児童・生徒一人一人に応じた指導が展開でき、基礎学力の向上につながると考えられる。

Ⅲ　研究の成果と課題

◆　第１分科会

【成果】

○振り返りカードを活用し児童・生徒が友達などに紹介したい図書についての交流の場を設けることで、読む楽しさを共有することができ、読書への意欲を高めることができた。

○振り返りカードの個々の読書記録をもとに、分類番号別リストやお薦め図書リストなど、指導目的に沿ったリストを、児童・生徒自身や教師が作成できた。そのブックリストを個・学級・学年・全校など、目的に応じて知らせることで読書体験の共有化を図ることができ、児童・生徒が自ら手にする本の選択の幅を広げることができた。

○振り返りカードの継続使用により、児童・生徒自身に読書傾向を把握させ、読書への興味を高め、選書に役立てるなど自主的な読書活動につなげることができた。

○教師は、振り返りカードの記録によって児童・生徒の個々の読書に関する興味や読書力が把握でき、本の紹介や共感・励まし・称賛など個に応じた支援ができた。

【課題】

●教師が定期的に振り返りカードを点検・評価するなど、個に応じた指導を継続的に行うことが重要である。

●振り返りカードの項目は、児童・生徒の発達段階に応じて作成し、段階的に繰り返し指導することが読書の習慣化を図るために有効である。児童・生徒の変容を見取り、個に応じた支援をしていくために、継続して取り組ませることによって、より大きな成果を期待できる。

●児童・生徒の読書時間や選書のジャンルについては個人差が大きいため、観点を決めて自分の読書を振り返らせることの意義は十分にあったが、その項目については、児童・生徒が理解しやすい表現になるよう、さらに検討していく必要がある。

◆　第２分科会

【成果】

○児童・生徒が各自の課題（仮テーマ）を設定し、資料・情報を集めて整理しながら課題（本テーマ）を決定するまでに十分な時間をかけて自らの目標を明確にさせる。そのことにより、調べることに対する意欲の高まりが持続できた。

○図書資料やインターネット情報などの複数の手段で得た情報を組み合わせることにより、課題解決のために必要な情報の正しさについて裏付けを得ることができた。それにより、調べたことに自信をもたせて理解させることができた。

○調べる過程において、学校図書館を積極的に活用する機会を設けることにより、学校図書館が情報収集の場であることを体験させることができた。

○ウェビング図による課題発見やフローチャートによる思考を整理するなどの、作業を取り入れた学習活動を展開することにより、各自の課題を深める姿勢をもたせることができた。

○調べてわかったことや自分の考えをまとめて発表し「聞き取りメモ」や「共有化シート」によって相互に個々の発見や成果を確認し合うことができた。それにより自分の考えと他者の考えを比較したり他者の観点から課題を見直したりして、次の新たな課題を引き出すことができた。

【課題】

●課題発見のためのウェビングや、思考・判断のためのフローチャートなどは、児童・生徒の発達段階に応じた項目を設定し、児童・生徒自身が記入することによって内容を確認できるよう適切な工夫を加えていく必要がある。

●学校図書館の蔵書の実状を踏まえて、教師は公共図書館との連携体制やインターネット情報の下調べなど、事前の十分な準備が必要である。

●継続的な学習計画により、できる限り学校図書館を活用し、児童・生徒が本を手にとる機会と時間を確保することが重要である。

【成果】

○本を読んで感動したことや調べて新しく知ったことなどを友達と共有化する活動を通して、児童・生徒の読書への意欲が高まった。

○振り返りカードを朝読書や家庭学習にも利用したり、国語科以外の教科や様々な活動にも学校図書館の活用を意識して取り入れたりしたことにより、児童・生徒にとって本や学校図書館が身近な存在となり、日常的に本に親しむ姿が見られるようになった。

○振り返りカードやフローチャートの内容を児童・生徒の発達段階に合わせて作成し、段階的に活用できるようにしたことにより、各学年での取り組みや個の変容の見取りが可能になり、より読書興味や読書力に即した支援の方法を探ることができた。

○振り返りカードや調べ学習における７つの学習過程の取り組みによって、個々の読書の仕方や学習の状況が把握しやすくなり、個に応じた支援がより行いやすくなった。

【課題】

●学校図書館が、新しい情報を得る場や読書への興味を高める場となるために、こまめに資料を更新・精選し、分類番号順に整理するなど学校図書館の環境整備を行っていく。そして、児童・生徒の興味・関心、学習活動に応じた蔵書を充実し、それらの本を紹介していくことが必要である。

●自ら本を手にとる子どもの育成のためには、学校生活のあらゆる場面で学校図書館を活用していくことが望ましい。そのためにも、各校の学校図書館司書教諭、学校図書館担当者を中心に図書館ガイダンスを行い利用の仕方の共通理解を図るなどして、学校図書館活動について全教員の理解を深めていくことが大切である。

平成１７年度　教育研究員名簿（　学校図書館　）

	区市町村名	学　校　名	氏　　名
第1分科会	墨　田　区	緑　　小　　学　　校	○リーヤンコ久仁子
	世田谷区	瀬　田　小　学　校	中　川　美　和
	板　橋　区	板橋第六小学校	渡邉富美子
	江戸川区	江　戸　川　小　学　校	小　池　和　美
	青　梅　市	第　六　小　学　校	吉　川　有　子
	羽　村　市	栄　　小　　学　　校	柳　原　葉　子
	大　田　区	御　園　中　学　校	松　井　圭　一
	八王子市	上　柚　木　中　学　校	◎愛　甲　尚　美
	武蔵野市	第　五　中　学　校	岩　上　桂　子
第2分科会	中　央　区	月島第三小学校	池　田　眞　紀
	板　橋　区	高島第七小学校	齋　藤　大　史
	狛　江　市	狛江第三小学校	木　村　慶　子
	清　瀬　市	清瀬第六小学校	鈴　木　晶　子
	豊　島　区	千登世橋中学校	鈴　木　明　美
	足　立　区	第　四　中　学　校	○武　田　敬　子
		都立小岩高等学校	本　間　ま　す　み
		都立葛飾ろう学校	吉　田　雅　美

◎世話人　○副世話人

担当　東京都教職員研修センター指導主事　伊藤　聡
指導主事　渡辺　円

平成１７年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１７年度　　第１２号

平成１８年1月１６日

編集・発行　　東京都教職員研修センター
所在地　　東京都目黒区目黒一丁目１番１４号
電話番号　０３－５４３４－１９７４

印刷会社名　　株式会社　今　関　印　刷